



[講演]

# 留学生と日本人学生の 協働がもたらす学び —経済学部の実践—

立教大学経済学部経済政策学科教授  
巖 成男 氏

○小林 韓先生、ありがとうございました。

続きまして、巖先生のご講演です。タイトルは「留学生と日本人学生の協働がもたらす学び—経済学部の実践—」です。よろしくお願いいたします。

○巖 皆様、こんにちは。本日は、「留学生と日本人学生の協働がもたらす学び」に関しまして、経済学部の実践を紹介させていただきたいと思います。私は経済学部で「中国経済論」を教えている巖成男（ゲンセイナン）と申します。わたし自身、20年前に中国から留学生として来日し、日本の大学院で学び、こうやって日本で研究と生活を続けています。皆さんはご存じかも知れませんが、中国人は謝るのがあまり得意ではない、と言われておりますけれども、私の本日の発表はまずエクスキューズからはじめたいと思います。

と言いますのは、私も観光学部の韓先生と同じく、留学生と日本人学生の協働がもたらす学びの実践に取り組んでいる経済学部の学生さんと一緒に発表を行う計画でしたが、学生さんたちがゼミの合宿などの都合で参加できず、本日は学生たちの代わりに、私が経済学部の実践についてご紹介したいと思っております。中国人でありながら、私がまずエクスキューズから本日の話をはじめたということとは、後の話とつながっていきますので、皆さん忘れないでくださいね。【スライド③-1】

最初に、経済学部における外国人留学生の実態について、若干紹介させていただきます。先ほどの丸山先生のお話にもありましたが、2015年までは、経済学部にも留学生がほとんどいなくて、ごく少数でしたので、誰が留学生なのかもほ

とんどわからない状態でした。しかも、入学する学生が少ない分、成績も優秀な留学生、つまり日本人学生とほぼ同じレベルの日本語力を持つ学生が入学していましたので、学部として特段のケアをする必要もなくやってきたと言えます。しかし、それが2016年から増えはじめ、何と2017年には31名が入学しています。31名という人数は、経済学部定員の680人（1年）の約5%にあたり、立教大学全体が目指している正規学部留学生の受け入れ目標（200人／年）の達成にもかなり寄与している、ということになるかと思っていました。

そして、2018年でも24名が入学し、経済学部に留学生が増えているという事実について、学生も教員もそれぞれ認識するようになりました。特に教員の場合は、授業中で少し難解そうな表情をしている学生がいる、日本語がそれほどうまくない留学生がいる、というような印象を受けるようになります。一方で、大学院生のほうは、それほど大きな変動がなく推移しております。しかし、2019年度は入試制度の変化（英語成績の提出を求めた）がありまして、制度変更の最初年度であることから歩留まり率の予測が難しかったこともあり、入学した留学生が4名になってしまいました。急激な減少でした。

経済学部における留学生の受け入れ人数については、これまで特に厳密な基準があったわけではなく、おおよそ10名から20名の間を想定してきたようですが、それに照らして見ますと、31名（2017年）、あるいは24名（2018）が入った年は、これもまたイレギュラーで、実は合格を出した数のほとんどが入学してしまった年でした。そういうこともあって、2019年度はちょっと合格者数も減らしたところで、歩留まり率が低くなり、激減してしまった、ということになります。そのぐらい留学生の歩留まり率は読みにくいということです。【ス

### ライド③-2】

留学生が2016年から急激に増えたことに伴い、やはりこれだけ増えていくと、学部として何らかの対応をしなければならない、という共通認識が生まれます。その第一歩となる「経済学部における留学生の学習と生活に関する現状把握と対応」の内容については、昨年の日本語教育センターのシンポジウムにおいて、当時の菅沼隆経済学部長が紹介をしています。その内容について、簡単にまとめて紹介いたしましょう。

まずは、実態を把握しないと対応ができないということで、何人かの教員が分担して、留学生を4、5人ずつ面談しました。そして全ての教員に対して、指導

している（もしくは授業に参加している）留学生の学びと生活の実態に関する印象を問うアンケート調査を行いました。それに基づいて、留学生たちの学び、生活の実態をみてみたら、やっぱり成績はやや全体平均を下回っている、ということがわかりました。留学生の中でも、非常に優秀で日本人学生と比べても遜色のない学生も確かに何人かいました。その一方で、全体的には、平均をやや下回り、日本語能力にも少し難があるということもわかりました。特にレポートを書くときには難しい、と留学生たちは言っていました。さらに専門ゼミナールへの所属率が非常に低い、ということもわかりました。経済学部は入学定員が多いことから、専門ゼミナールを必修化することが難しく、必修科目ではないです。その結果、ゼミナールに入らなくても卒業できるようになっていますので、留学生の多くがゼミナールに所属して、日本人学生らとより密接にかかわりながら一緒に学ぼうというモチベーションが低い（実際はゼミナールの選考面接で落ちてしまうケースもある）、ということがわかりました。

そうなりますと、日本人学生らとのネットワークがますます希薄になっていき、私が面談した何人かの留学生は、私が外国人である、留学生だったということもあって、いろいろ自分の悩みとかを相談してくれましたけれども、やはり留学生同士で集まっている時間が長い、ということもわかりました。日本での生活においても、つまり校外でも、留学生同士で集まっているということが実態だった、という学生さんもいました。【スライド③-3】

受け入れる留学生が増えていきますと、その中には学習意欲だったり、成績だったり、相対的に低い学生さんも混ざっていきますので、昔のように何もしなくても大丈夫だった時代とは違ってきた、というのが経済学部としての公式見解となったのが2018年度だったと思います。

そして、対応として経済学部が何をしたかといいますと、まず、全教員でこういう実態に関する情報を共有し、発見した問題・課題に対して、学部みんなで努力して対応していくことを確認しました。その一つが、授業の時に、もし留学生を確定することができれば、それなりの配慮をする、そしてゼミナールの選考において、1ゼミ1人ぐらいは留学生を受け入れるように配慮することを、学部長が教授会にてすべての先生方をお願いをするなど、をしました。また、学部が「留学生懇談会」というものを主催して、新入生、今いる学生、大学院生などのすべての留学生を招待し、学部教員らと一緒に集まり、みんなで話し合ったり、

懇親を深めたりする機会を設けています。そして、経済学部国際化推進委員会メンバーの中で、留学生支援担当の教員を決め、留学生支援に当たっています。また、経済学部としてこれから新しくやっていこうとしたのが、日本人学生による交流支援グループの組織化です。

そして、去年シンポジウムにおいて前学部長の菅沼隆先生がまとめて紹介しました今後の課題としては、「経済学+日本語」の授業、先ほど、丸山先生のお話の中にもありましたけれども、やさしい日本語による経済学とか、そういう科目をこれから開発していこうという話と、あとは作文能力、そして非漢字圏留学生の場合ですと、漢字教育をこれから充実させよう、もしくは学習に取り組むよう促そうという話をしました。あとは専門ゼミナールへの所属率を向上させようということですが、去年は新規の留学生が24名でしたので、専門ゼミナールの受け入れが課題となりましたが、今年は4名しか留学生がいませんので全く問題（議論）にならない。どこに行ったかわからないというよう状況でして、課題と現状が若干離れてしまったというのがいまの実態です。【スライド③-4】

日本人学生による留学生支援グループの組織化は2018年秋にはじまって、今年の4月より本格的に活動をしているわけですが、冒頭でエクスキューズしました通り、本日は私が学生さんに代わってその活動について紹介いたします。スライドにありますとおり、現在は大体10人ぐらいで活動しています。その中には日本人学生もいれば留学生もいて、半分ずつくらいです。現在の参加者は全員が2年生か、3年生です。それに担当教員一人（経済学部国際化推進委員会のメンバーの菊池雄太先生）が管理、サポート役として参加しています。今のところ、活動への参加形態は、自由な参加で、自主的に集まり、活動することです。私たち経済学部の国際化推進委員会としましては、これを一つの組織として育てていくことを意図しておりますけれども、その組織づくりは今もなお模索中です。【スライド③-5】

活動の目的は、留学生と日本人を含む学生同士の親睦を深めたり、お互いに学び合ったり、何よりも留学生の方々が、大学での学び、日本での生活に関するさまざまな情報を日本人学生から教えてもらう、ということです。例えば授業の履修登録をするときに、どのような科目を選択するか、各科目の内容や担当する先生にはどのような特徴があるのか、などについての情報共有です。これらの情報は、日本人学生ですと、ごく普通に、サークルだったり、先輩だったりを通じて

いち早く入手して活用しているわけですが、留学生の場合、そういう交流と情報入手の機会が少ないのが実態です。このような活動を通じて留学生の役に立つと同時に、サポート活動の中で日本人学生にも成長してもらいたい、というのが私たちの大きな目標、目的でもあります。

活動内容に関しましては、主に二つに分かれています。まず、常時やっている活動としては、お昼休みにみんなが昼食（お弁当とかパンとか）を持って、空いている教室に集まり、昼食をとりながらみんなでおしゃべりをするというものです。これは、ほぼ週に1回のペースでやっています。みんなが集まって、おしゃべりしたり、先ほどの10人くらいのアクティブメンバー以外の新しいメンバーが来たら、自己紹介をやったり、お互いに紹介し合ったりすることをやります。また授業のレポートに関する話とか、試験に関する話とかしている様子でした。

また、本格的に新聞読みとかもするそうです。留学生に、新聞記事を読んでもらって、日本語の語彙、アクセント、そして意味などなどについて、日本人学生が教えたりするそうです。たまには、ゲームもやったりするそうです。私が聞いた話では、評判だったのが「いきなりプレゼン」のようなゲームだったそうです。指名された人がプレゼンテーションを行う途中に、聴衆が勝手にいろいろな写真を足していき、プレゼンターは自分の話をその写真に合わせて展開していく、というゲームだそうです。みんな大いに盛り上がったそうですが、こうやって日本語能力も、そしてお互いの社会文化について学んだり、相互理解を向上させたり、そういうさまざまな効果はあったと思われます。【スライド③-6】

もう一つが、臨時的、また校外活動的なものがありますけれども、小江戸川越の探訪、上野遊び、懇親会などを開催して、みんなで一緒に過ごす時間を作っているそうです。先ほど観光学部の松尾さんの話の中で出てきたように、こういうプログラムを構想し、実施していく中で、日本人学生同士でも仲間が増えたり、学び合う機会が増えたりすることもあるので、これも大いにいいことではないかと思います。そして、秋学期はじめての10月にはみんなで懇親会をやったそうですが、送ってきた写真に写っているみんなの楽しい笑顔は、素敵そのものでした。そういうこともしながら、経済学部の留学生サポートプログラムは、みんなで楽しく、仲よく、確実に前進しています。

留学生プログラムに参加する日本人学生にとって期待できる効果としては、いろいろありますけれども、何よりも、こうやってみんなで遊びに行こうとなると、

何人かのリーダー的役割を担う学生たちは、コース、時間、場所、内容などについていろいろと考えていく中で、グループ活動の企画、組織能力の向上が図られていくのではないかと考えています。【スライド③-7】

この活動における課題としましては、実はやったことよりも、課題のほうが多いですが、何よりも、参加者が10人ぐらいでほぼ確定していて、新しいメンバーの出入りが少ない、というのが一番大きな問題ではないかと思っています。今年の新入生の4人の留学生は、日本人学生とほぼ同じぐらいの日本語力だったり、日本社会に対する理解だったりというレベルの学生だからなのか、そもそも日本人学生と一緒に何かを学び合おうという動機がないのか、それとも、あまりにもシャイな、余りにも日本語ができないので、こういう活動に参加しないのか、まだ原因を特定できておりませんが、その1年生が一人も参加していないというのが大きな問題です。

私たちにとって最大の心配事は、本当にサポートを必要としている留学生（日本語力が低く、友人も少なく、寂しい思いをし、かつ勉強にも困っている留学生）は、こういうところにあまり顔を出したがるのではないかと、ということです。こういう活動に熱心に参加する留学生というのは、それなりに日本語もできて、活発で、日常生活も楽しくやっている人たちであるような気がします。少し矛盾しますが、これをどうやって解決していくかというのも、私たち経済学部のみならず、大学全体における留学生サポートにおいても大きな課題ではないかと思えます。先生方から本日、後のご議論の中でいいアイデアを提供していただければ幸いに存じます。

あとは、先ほども言いましたとおりサポート体制を構築して、活動が継続されるような組織に育てていきたいと考えています。参加している学生の中から現在、日本人学生1名と中国人留学生1名を指名して、それぞれ委員長と副委員長を決めているところです。この学生さんたちを中心に、来年こそは1つの組織のもとで活動できるように、またそれを次の学年の学生さんたちに継承していく、そういうものにしていきたいと考えています。【スライド③-8】

経済学部では、留学生と日本人学生がこうやって混ざり合って、勉強して、生活して、そして学び合っていく、ということが当たり前の日常のように見られるグローバルキャンパスを創ってまいりたいと考えています。単に多くの留学生が入学してきたらグローバル化ではないと思います。混ざり合って、支え合って、

学び合うキャンパス内で、学生は留学しなくてもグローバルな素養と行動力を備える人材になっていけると信じています。

立教大学で教えている私の念願でもありますけれども、このようなグローバルキャンパスにて学び合った立教生のイメージは、留学生の場合は、もちろん日本語ができ、専門知識を持ち、日本の文化や社会に対する深い理解をもち、それに加えてグローバル素養も身につけているし、人生を通じて助け合い、支え合える日本人の仲間もいる。その一方で日本人学生は、英語だったり、中国語だったり、そのほかの言語に日常的に触れ、また専門知識、グローバル素養も身に付いている。それに加えて世界のさまざまな国の仲間がいて、またこのプログラムの運営を通して培った経験、能力、および自信がある。私は、現在このプログラムに携わっている3年生の学生さんらがこれからの就職活動において、大学で一番熱心に取り組まれたものは何ですか、という質問には、この留学生サポートプログラムを立ち上げ、運営してきました、と自信を持って言ってもいいと思っています。このような新しいかつ重要な意味をもつプログラムを立ち上げたメンバーですので、「ゼロから創り上げました」と大いにアピールしてもいいのではないかと勧めています。

もちろん経済学部国際化にはまだまだ課題もたくさんあります。留学生数も毎年急激に変動することもありますし、学部の組織改編だったり、担当教員の変化だったり、このプログラムに対する一貫性のある対応が難しいこともあります。また、学生らの自由な活動企画に対して活動経費を少しでも充てられたらいいなとも思っております（2020年度に関しては、少しは予算が割り当てられています）。このような困難や課題もたくさんありますけれども、立教大学経済学部のグローバルキャンパス化は、これからも確実に、そして着実に進んでいこうと思っています。【スライド③-9】

最後になりますが、少しだけ自分の専門分野（経済学）と本日の話題の「多様な日本語レベルの留学生を受け入れ、留学生と日本人学生が学び合う、支え合う、グローバルキャンパス作り」との関連で、自分の考えを若干紹介したいと思います。現在、日本の少子高齢化は急速に進んでおりまして、それを前提に外国からの移民を受け入れないといけなく、ということが盛んに議論されています。その流れで昨年には、外国人労働者受け入れ法が成立し、これから外国人労働者をたくさん受け入れる、という方向は決まっているのですが、その人数が年間約30



万人と言われるように目標が設定されています。昨今、日本における留学生受け入れ数も、年間約 30 万人規模というようになっています。

私が言いたいのは、現在の外国人労働者の受け入れ政策が、日本語もできず、日本社会に対する理解もない外国の方々を、ただ賃金が安いからと言って、短期的な出稼ぎ労働者として受け入れようとしていることがあまりにも近視眼的で問題点の多い政策である、ということです。その力とエネルギー（政策構想や予算）を、本日私たちが議論したような留学生の受け入れに注いでいけば、4 年間（日本語の集中教育を受ける期間も含めると 4 年半）大学生として在籍し、その間に日本語もしっかり勉強し、日本の文化や社会に対する理解も深め、そして日本人と同じように発表の冒頭にエクスキューズもできる、こういう外国人を増やしたほうがよいのではないかと考えています。将来的に、現在のヨーロッパで起きているように、海外から受け入れた移民に対する反動で、多くの政治的・社会的・経済的問題が噴出する可能性も否定できないでしょう。

このような視点からみますと、本日たくさん議論しました、多様な日本語力の学部留学生を受け入れ、立教大学でしっかりと教育を与え、人材として育成し、国内外に排出していく、ということは、単に立教大学のグローバル化の目標だけではないと言えるのではないのでしょうか。これをグッドプラクティスとして展開していくことにより、将来的に日本の留学生、移民受け入れ政策にも影響を与える可能性を潜んでいると、漠然とした考えではありますけれども、そういうことができればいいなと思っております。少し時間をオーバーしてしまいましたが、以上になります。ご清聴、ありがとうございました。【スライド③-10】



## 【スライド③-1】

日本語教育センターシンポジウム2019（2019年12月7日）

「多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学び」

## 留学生と日本人学生の協働がもたらす学び —経済学部の実践—



立教大学経済学部

嚴成男

chn-yan@rikkyo.ac.jp

1

## 【スライド③-2】

### 1. 経済学部における外国人留学生の学びと生活の実態

#### ◆立教大学経済学部における留学生入学者数の推移

	学部生	大学院生
2014年	2	4
2015年	1	3
2016年	9	4
2017年	31	3
2018年	24	4
2019年	4	7

\* 学部定員：680人／学年

大学院入学者(2019)：14人

#### ◆留学生受け入れ数に関する経済学部の考え

- 公式的な枠・基準はないが、おおよそ10～20人？
- 歩留まり率は、読みにくい—2017～2019年までの経験
- 2019年の特別事情：「英語成績の提出」を初導入

2

【スライド③-3】

1. 経済学部における外国人留学生の学びと生活の実態

◆昨年度(2018)の日本語教育センターシンポジウム「正規学部留学生受け入れの新時代ー多様な留学生との学びは大学をどう変えるかー」における経済学部長(菅沼隆氏)による現状把握と対応

・背景：2017年以降の学部留学生急増→追加的な教育措置の必要性→実態調査の実施(2018年度、面接／アンケート調査)

・現状：

- (1) 成績は、平均をやや下回る
- (2) 日本語能力には、やはり難がある(特にライティング)
- (3) 専門ゼミナールへの所属率は低い(\*必修ではない)
- (4) 日本人学生とのネットワークが薄い(留学生同士の交流が中心)
- (5) 学習意欲、成績において、経年低下の傾向？

3

【スライド③-4】

1. 経済学部における外国人留学生の学びと生活の実態

◆対応：

- (1) 全教員による情報共有、および「留意・配慮」の確認
- (2) 留学生懇談会を開催(2018年から、毎年5月ごろ)
- (3) 担当部署：経済学部・国際化推進委員会

- (4) 日本人学生による交流・支援グループの組織化  
(2018年秋に組織化開始、2019年4月より本格スタート)

◆今後の課題：

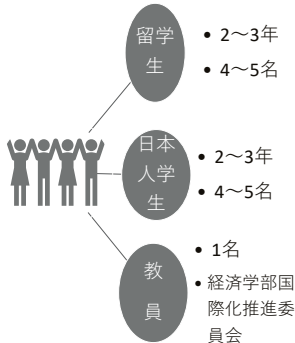
- (1) 「経済学＋日本語」の授業の開発(新規科目、プログラム)
- (2) 作文能力の向上(日本語授業の継続的な履修を促す)
- (3) 非漢字圏留学生の漢字教育(日本語授業の継続的な履修を促す)
- (4) 専門ゼミナールへの所属率向上  
(教員の積極的な受け入れを促す、特定のゼミへの集中を改善)

4

【スライド③-5】

## 2. 経済学部「留学生サポートプログラム」の始動

### ◆体制（アクティブメンバー）



### ◆参加形態：

- ・ 交流に関心のある学生の自主的な参加と活動
- 公式的な組織作りは、依然模索中(...委員会)

### ◆目的：

- ・ 親睦を深める
- ・ 留学生の大学における学習と生活のサポート
- ・ 学び合う
- ・ 活動を企画、運営
- 留学生にも、日本人学生にも役立つ活動に

5

【スライド③-6】

## 2. 経済学部「留学生サポートプログラム」の始動

### ◆活動内容：

- (1) 常時：お昼休みの集まり(昼食を食べながら)
  - ・ おしゃべり(自己紹介、活動を如何に展開していくか)
  - ・ 授業の履修やレポートなどに関する情報交換
  - ・ 新聞読み(留学生)：ニュースについての意見発表、議論  
(その他：Youtubeでのニュース鑑賞→議論)
  - ・ 即興プレゼン練習(ゲーム感覚で)

### →期待される効果

- ・ 留学生の日本語能力向上(読み方、語彙、文法などへのアドバイス)
- ・ 留学生の日本社会文化学習、理解の向上(知らないものがたくさん)
- ・ プレゼン能力の向上(留学生+日本人学生)
- ・ 相互理解や学習(お互いの国、文化、考え方について)

6

【スライド③-7】

## 2. 経済学部「留学生サポートプログラム」の始動

### ◆活動内容：

#### (2) 臨時・校外活動

- ・川越探訪 (5月11日、約10人参加)
- ・経済学部留学生歓迎会 (5月末、学生・教員、約40人参加)
- ・上野探訪 (7月21日、日本人のみで食事)
- ・池袋で懇親会 (10月19日、約10人)

#### →→期待される効果

- ・親睦を深める (教員も含めて)
- ・留学生の日本語能力向上(読み方、語彙、文法などへのアドバイス)
- ・留学生の日本社会文化学習、理解の向上(知らないものがたくさん)
- ・相互理解や学習(お互いの国、文化、考え方について)
- ・グループ活動の企画・組織能力の向上

7

【スライド③-8】

## 2. 経済学部「留学生サポートプログラム」の始動

### ◆課題

#### 第一、参加者を如何に増やすか

- ・アクティブメンバーは固まっているが、そのほかの学生の参加は、まばら
  - ・1年生の参加がほとんどない
  - ・留学生は中国出身者がほとんど
- 最大の問題：サポートを必要としている人が参加していない？

#### 第二、組織体制の構築

- ・組織的活動→継承され、影響力を拡大していく上で必要  
活動内容、コンテンツの整備、学部との連携
- 最大の課題：1年生の参加者を増やし、組織の継承に努める

8

## 【スライド③-9】

**3. 留学生と日本人学生の協働がもたらす学びの未来像****◆立教大学経済学部のグローバルキャンパス化**

- ・外国人(留学生)が多いだけではない。
- ・留学生と日本人学生が混ざり、支え合い、学び合うキャンパス
- ・海外に行かなくても、十分なグローバル素養が身に付く

**➔このようなキャンパスに学びと生活の基盤を置く立教大生**

留学生：日本語＋専門知識＋日本の文化や社会に対する理解  
＋グローバル素養＋日本人の仲間

日本人学生：英語（その他）＋専門知識＋グローバル素養  
＋世界各国の仲間＋

**サポートプログラム  
運営の実績と経験**

**◆多くの課題が残されている**

- ・入学する留学生数の変動
- ・学部組織・担当教員の変化
- ・活動経費も措置してあげたいが・・・

9

## 【スライド③-10】

**3. 留学生と日本人学生の協働がもたらす学びの未来像****◆日本の人口動態、労働力構造の変化など**

➔移民(労働力)の受け入れが一つの選択肢として議論、推進

- ・人口減少→需要減少・ダイナミズムの低下
- ・労働力減少→生産・革新・社会保障の低下

経済と社会の衰退、  
国の持続可能性低下

**◆移民(労働力)の受け入れ拡大の問題点**

- ・経済的効果(労働力・納税者増 vs. 社会福祉的成本)
- ・社会的摩擦と緊張の拡大：地域社会・コミュニティの変容

- ◆留学生を受け入れ、立教大学で教育(日本語＋専門知識＋日本社会の理解)を提供し、人材として育成していくことは、「外国人労働者受入拡大政策」の代替案として大いなる可能性を有する  
➔「立教グローバル戦略2.0」の実現のみならず、「グッドプラクティス」として、政府の留学生・移民受け入れ政策と戦略の構築・実施にも影響を与えていく。

10